中野文庫

九曜文庫

源氏小継序

此ちらぐみといふ云々 耕雲法師
のあつまれるものにしてがんじ
ぬ絶れはすやうをひとしたるのこ
そえんよいとゝ此書なるしるのこ
あらぬ事ゝの分ばどんあがえて
あまりにとりしんゝめにしたるの
あまぞ所とむこんまなびの人

序

ゐたとさせ後有しくなん此書をや
うより板に忘のてはあのつれど
あらざうせてのちゐかくれく世に出
られぬのしをとこみなゐた此書
あるさ人松根堂の何るじ吉田何が
うせたるうだりを忘らせしのへて
松のまとまとしさをとこふそれ其を
ふみのそしさ今やうそたぐかぎ見

に此をそへるのとこんゆるもまじき
どいゐしへのそそ此さふこんえたる
るの大むのをとりすべくいへり
これを見くまげこそすぢをあらそ
うまだとみもてゆくにたちの何
ことくかゝるゐ我ありける此さハうの
御絵のそしうれともいふべし
とりふそやがてこれが

文政七年乃茂　松齋藤井一高尚

あらし
関 風
忍あませ
うしをき

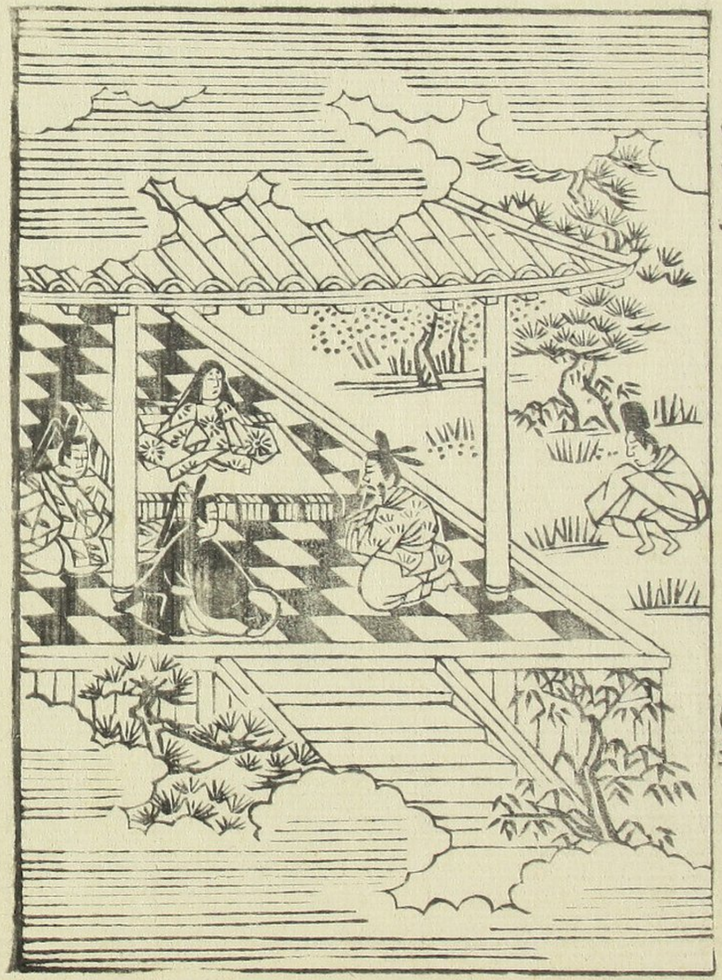
子をはこし
蓬 生
松 風
槿

一 桐壺

桐はかりといふ書(まき)は草木門のうちにあり
此(こ)殿(でん)の名なりとも志をひしやとゝ中ハ桐つかの
るのなりは桐つかに光今ん(ひ)しの母さふら
そせあふ桐とそきりつかのかうぬとゝ中光
はらうぬ一の人なるんとの母むをめゆてハなし
父ハ大納言まてうせあしへのまなわゆりて
ち君ゝきやのしありて母ゝ又つゝへ母へ
まりまひしそはし門(ミカド)ことのかうよときめ
色好へいかゝへの花かうぬみやをとこころ
そはきあふさかな頼りしはうぬ此(ゆゑ)服

まつまやひとくとろいてきけせまふおすす
程それなるまちらうのうゐさちまて屋を
かうれあさうのみや此ゝよ有ても人の心を
のこうこうしうこゝとゆふつきりまやありえん
此文ニハ為りまふ家のころ母かうゐかく
ますふ屋まひかさりるれハ大内のうちまて
人のうれまふするきるれハ此いと所にて
さとへあさせまふせまてのゆんさしのせり
るれハてらる所のせんしをまつりておのふ
此車ハいうしきくハ老くのするれハ兼
ろきの人ゆハゆるされさうましとおまうる

此ゆさしうりそのわりのことは
あつしくうやましすいきもまましつくる
しこさすかくさのさかうこれハあくさ
あるり かさうものほかひ三位のうゐのちゝR
さて大内を出るひしわり門此るとり坤
ませまひてさまくのことはくまへともそ
えくふして抱もや屋ゝさうましうぶのよ
かさりとてわうてみちのかすしきに
ゆ所ゆしきハいのちる利多り
是ハかうゐのかさりのうこそうし此ゆの
まくろすうハさきのくゐまるさまし

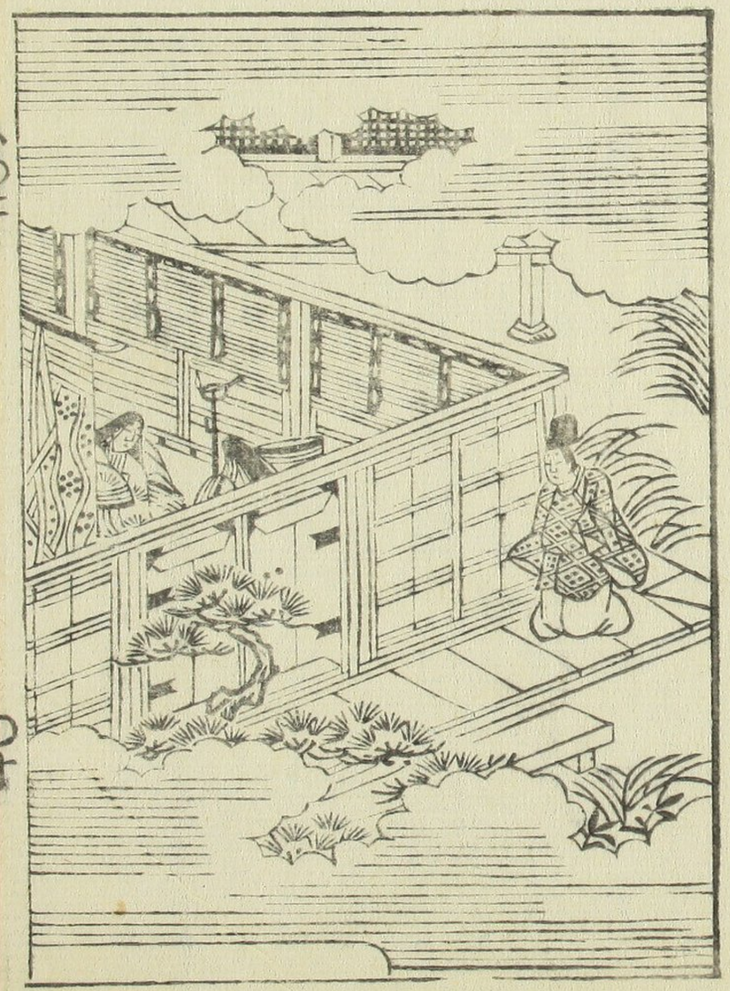


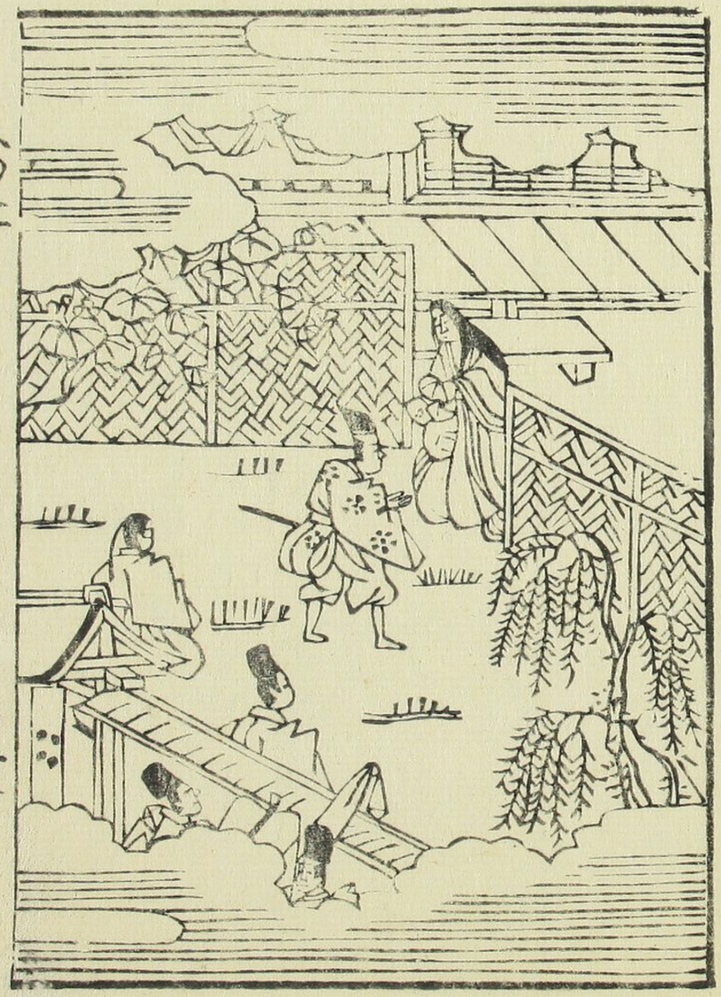
あひて四人むかしのうつゝなるすゝへあふ
ゑんしとひかゝ君とよせハ此姫ゑかゝや
やうよおりしませいかゝ日の文とこの人
ゆかりの四つ有の夜つかやこの文をゑん
おさまくよろしきゆゑ此ゑのひくに来りあひて
まつりて法ゐるに此のひくに来りあひて
四五人おさまふまいせいゐんとよせしを
此四ゑや又相つかの四門とゑんしの文四
門とゆるの此書よろしきゑしまふ事にて
ましまゐハ相つかの四門とゆるりこと人
ゑくまつるみとハ志んきのゆゝすと見て

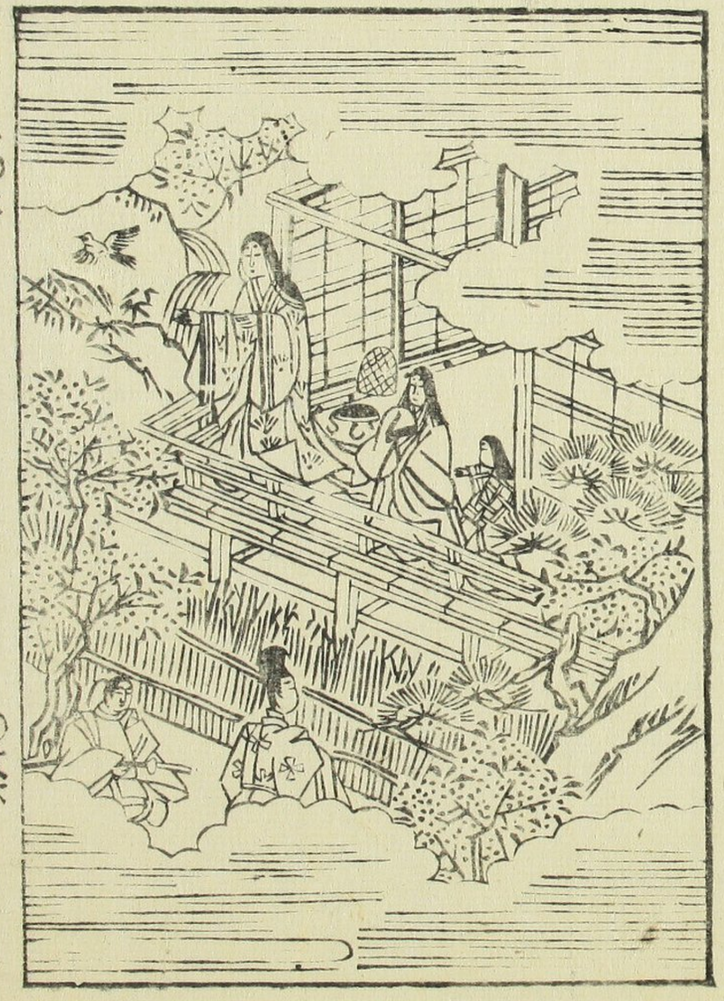
ゑりよくく心志へし

二　箒木

此書に見あきの夜のゆゑうりといふすゝゑん
しの君四ゆゑにおくゆゑうへ
大内のとゑゐるところにおり夜と四つ
くのうくさめにやこころとうの中ゐる
中にしハ源氏の四と志うとおゆひのこと
の四あてなりかの君とむきのうへさう表
敷といひし天二人来りて夜なきすき
ゆゑくなれハゆゑうりゆゑてよ人の志か
とゑりちうしあしとさゝめこれをわす

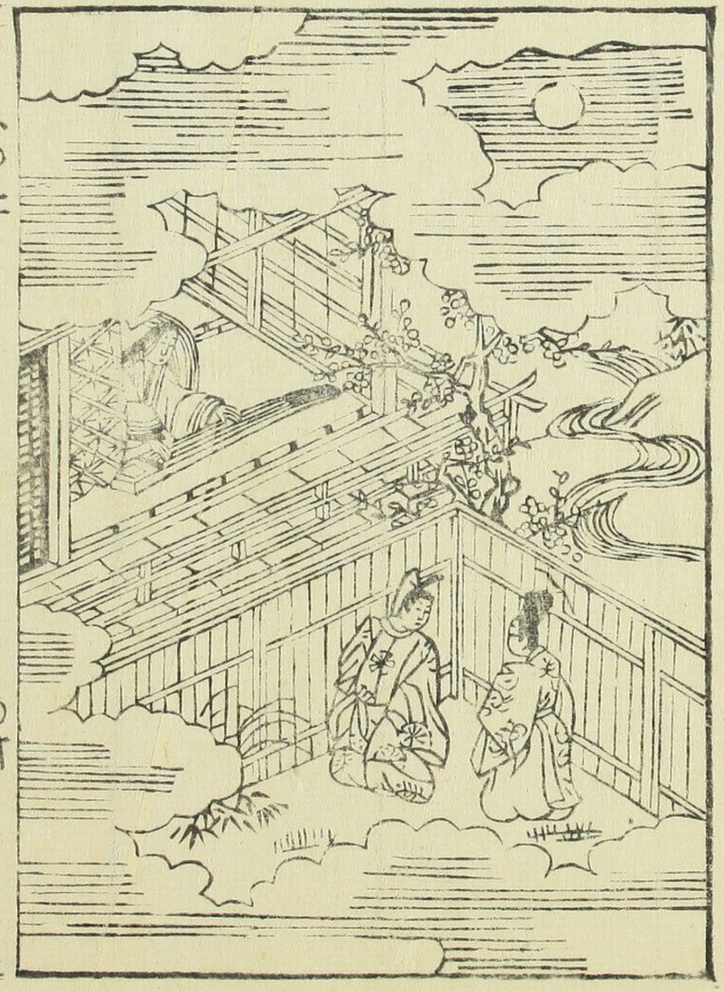




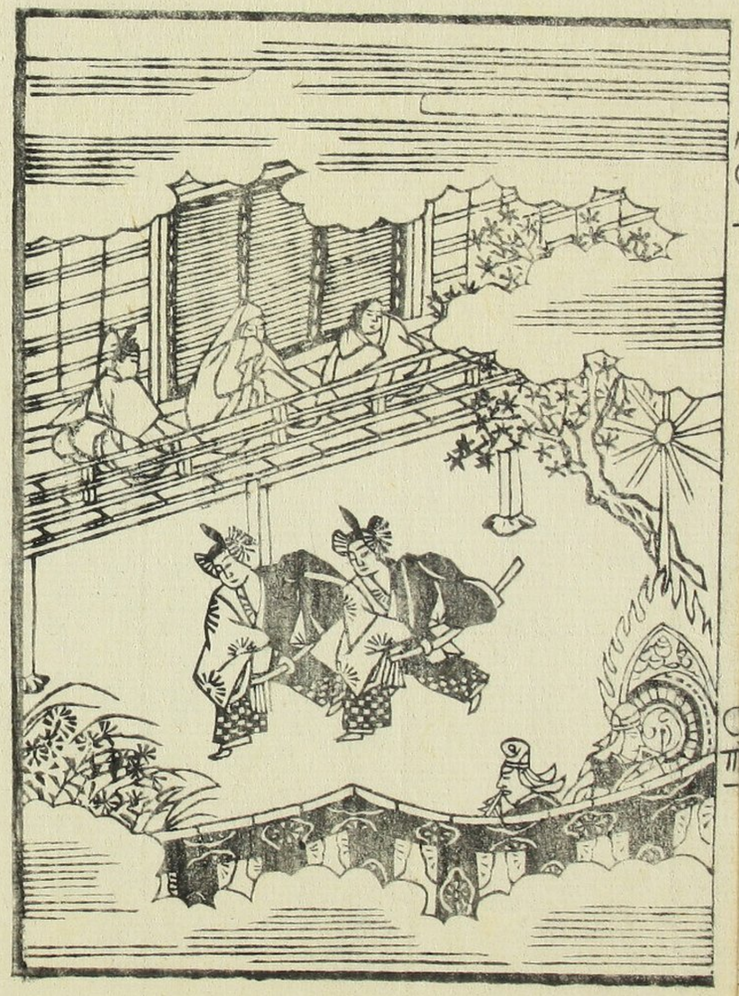


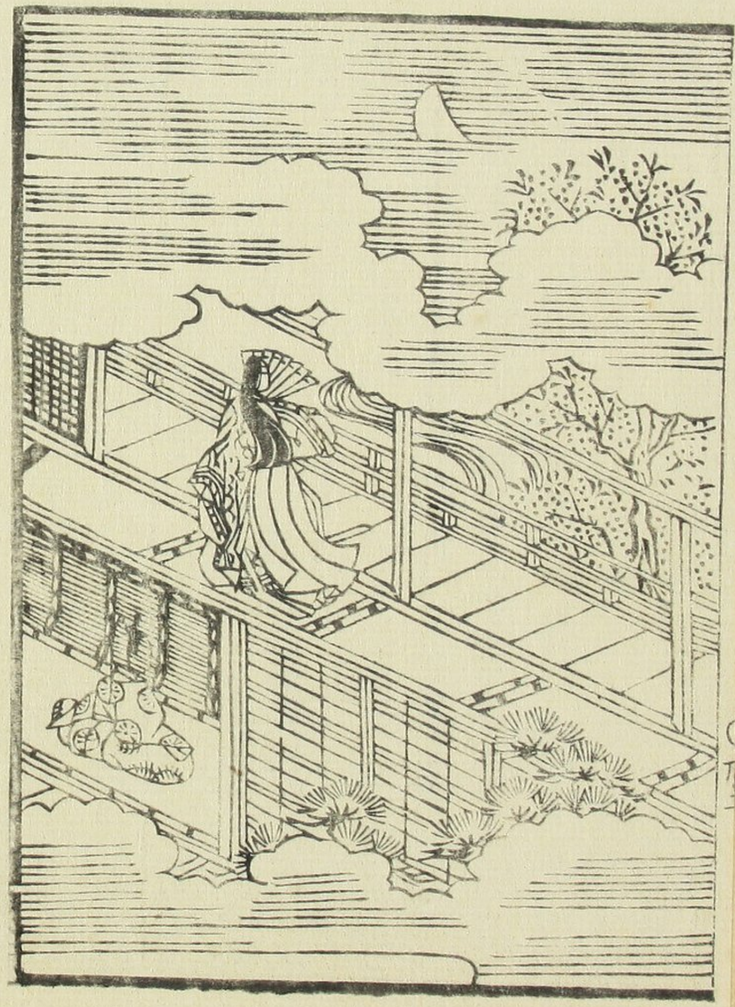
まへにいまたゆきもの中にしたりけれ
ときゆきもあしたまつり日のうつのきぬを
こさせてそさつまたりなとゆ[illegible]れを
いひしなりをのふるりかくてゆんさし
るうゆるなりてをんしあすをひ
さきのうへ四十文まてかくまこまふ源
氏中しかくまこまひしをこのうけさ在
なり中しうれとゆきんせいのすなり
六文の書こりしたしたり
来橋花　まうしたきのまひ
此書をもてしたつむ花といふすひたちの君

しやしかうきこえおもひしましさうせまひし
ゆあしよ姫君下人のうりてたいしさいと
そうなるゆきを海ひまてなる先をとし
まひそりそ中ゆつくへさせまふくく
せしくれりしかしてまうそまうり
まひうるまうそ中のゆあれとゆゆのこや
うふとて内よさふひうるうは宮さう
志うしくまりかうふんなれハみちまる
下てきせてそまうりまつるいと申ひ
のりうまおうしまたりしうりこのゆう
こちうあしうくさきあうさう



三月十六日のよさり出娘美そんのこ
をひきまひしなり





るゆしのうへにゆてなりしまゝ

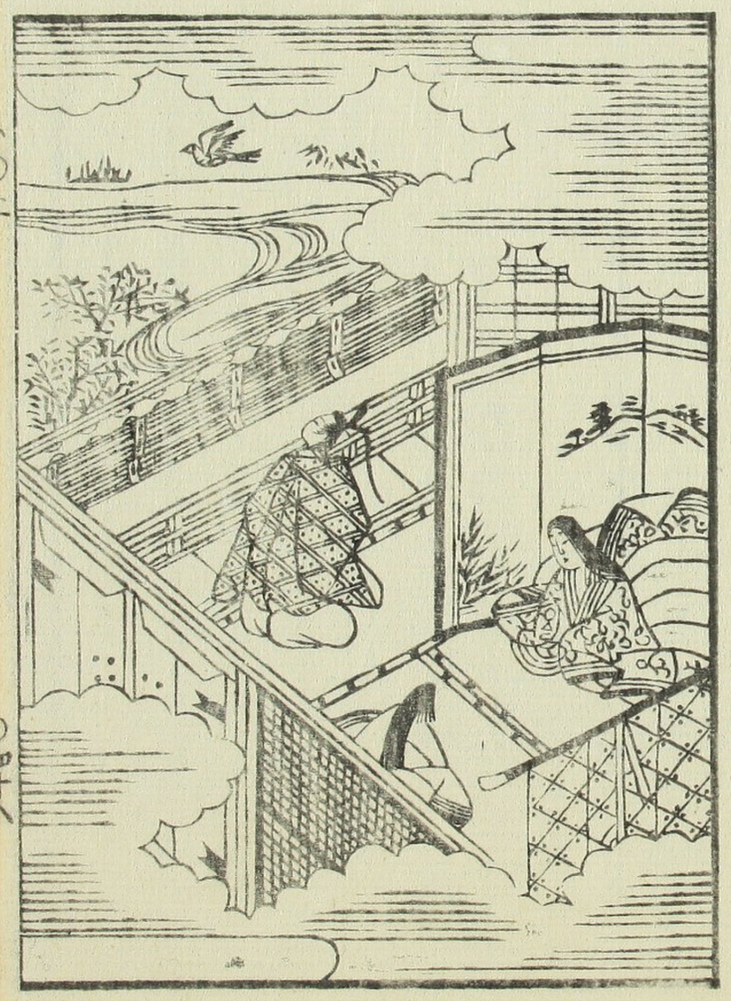
六　葵

此まてあつかひといふ事一の事にそ十二
まてえ服のその程よろしき屋にてひき入の
立居のひとまゝすわてれり海をかのうる
をはあつひのよとといふ此まてに源氏の御あ
よ東雀院の一の御とうの姫宮かしの
いつきにそ見たるをもふ御りとに源氏を
その此大将まて洗うまつりもふそのの
まし見ひきしき御ことにくへ目を
地とろりに此かのうへそ此比久きり乃

大将をもしこれてありしとるゝぬゆんまて
まつらもしくれりしさせハ御ん女くさ
かもそて出てゆ給人まるに又かんりひ
かふ六条の御やすもも志れひてそ
給ふに御車のうそこころを御ものへ
くあらそひてみやすところ此御車
をうちそんしるとせしなるも車あら
うひとのかすこれなり

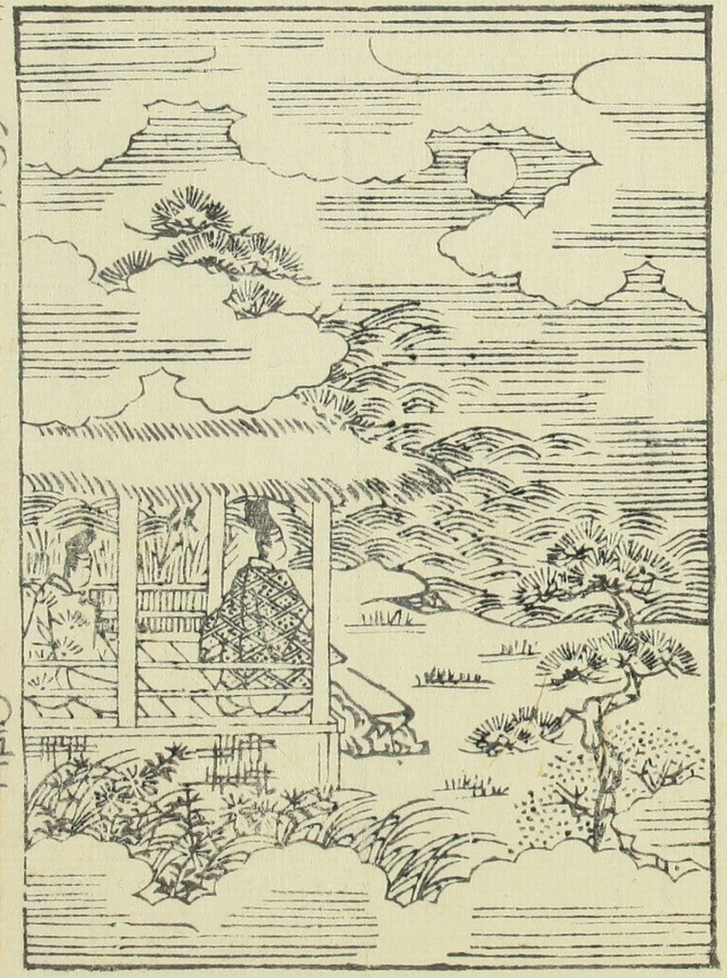
いせの歌えぬ下回ありしにひきつきて
ていせの事えよくてわかふ伴勢れと
やまをかさもいつへしことは
あらそひの車　稼ぐむ
なれぬ　かすなるね
なましいふはみやまを前のすちり旬より
あらそひふくはしくしくかものなふにかと
そきといふすあつも是ハ私ふの目むら
さきのうとし一車ゆくゆ給ひしよいそ
あふかゆしの打そしなりくアルさせさ
まへいこよのそうせよとさ　ちうイ　せすひ

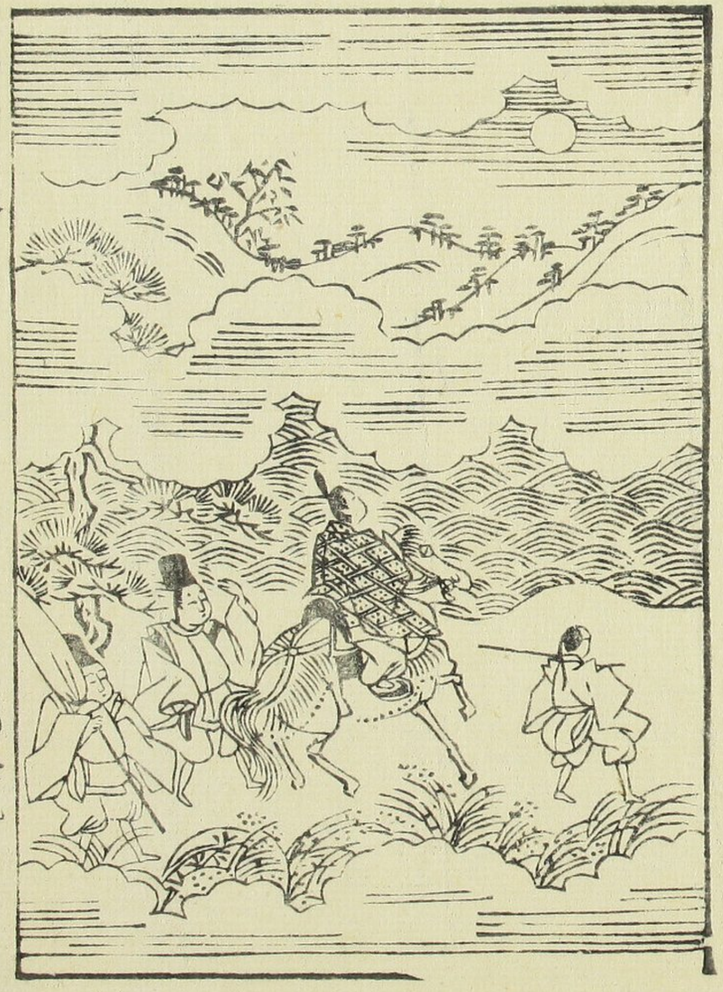
てむらさきのこれ此ひしを源氏そうせのふ
かりのまつりうりうそきといふことを
これとふみ此ひしそきなそくふ給
いまひて此ひしくんしまゝあふ
ちうわるきふ給のうこれみるふさの
おひゆくもふハ是のこそこん
とうこまふ此ひしすむらさき
ふひろともいくらしらんさしめなく
みちひなしかのおとけりらぬり
とうこまふしなうこまつらのき四月
此ものなふとも見あまとともいひしなう



かりのことはなるゝ事とはこのなるゝ
さゝそれはりしなめにさなくしろもおぼし
しそくいはんとはなりてかてなしろたく
のなるにんさしなるゝぬかさなくおぼしめし
てちうさゝろハかりそめれよりとのこれ
たまゝかりしはいつの月日後かきなへき
四つかきなるゝ孫ハせんかさなくれかりめし
しつゝしかふ御猿其心よろしめてひん
かきのふとて此ころのなりひはたもやせお
へハまゝかりしなれめなるゝしくしく
みなしてこのかけのやうはや屋せて侍

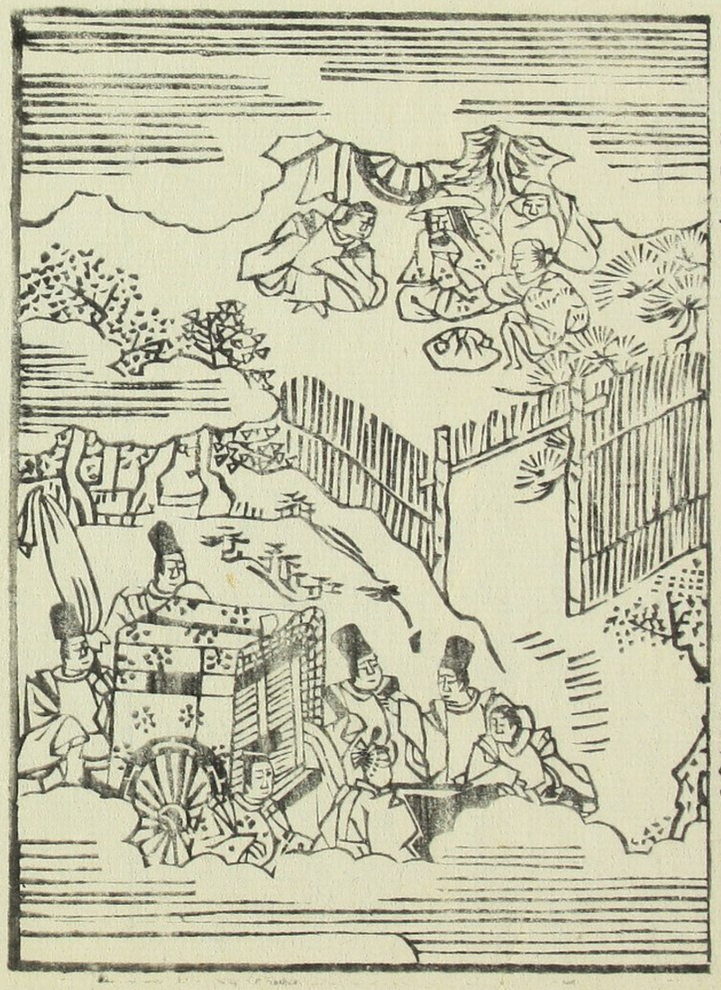
あるまゝなるまさうなとのこさまへハとん
かこさゝゝなるゝことひとめうけて見をこ
せのへるひと志のひかし
男はうくてさまうへぬとも若なるなら
さゝぬうゝゝのうけハとなれし
とよゝのひしあるすむうさきの上
まうきそもうけこまとまる抱なるハ
かゝゝを見てもなくさあてまし
とよゝかりしのひしことはなりかゝゝ
のかゝゝす後のまうれなとはつけさせ給
ぬ今ー源子の事にはう後いつもといふす

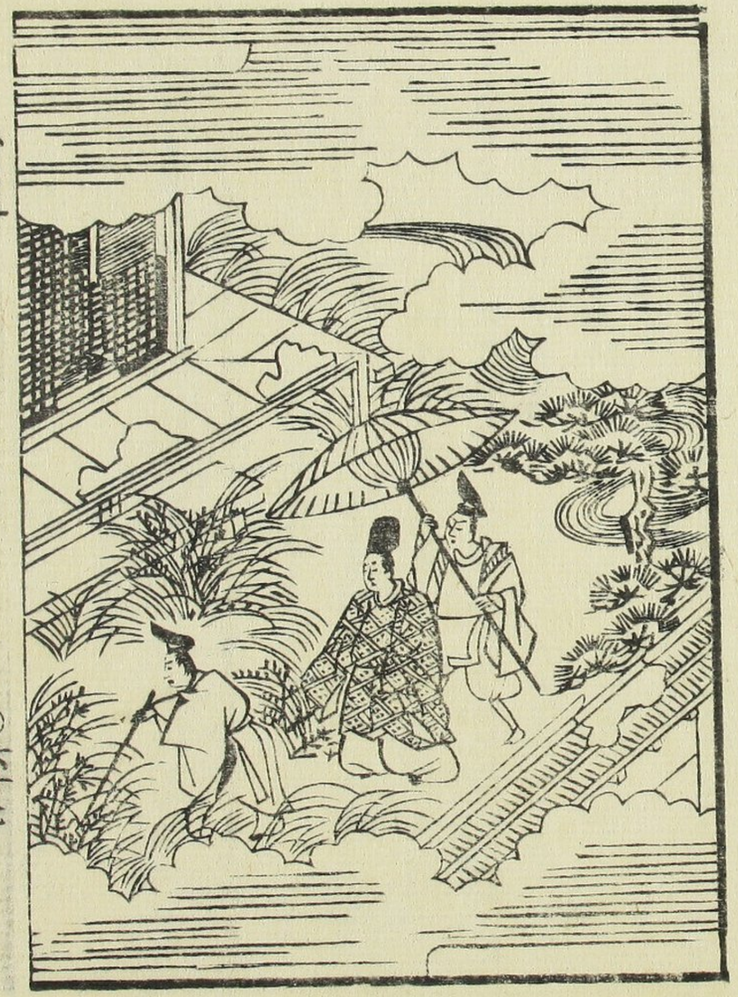




家人むかへ家にをてむらさきの上の御
子にしたくとうくうの君に家つきたまふ
ありしの中文とは此御年なれ又ありし
とりはかなりしとのふす是はありしのことを
きこえひのとまひにまちすへな事を
いかに都みなはしこさしあふんとおもひ
てんのにまうもそれぬさきにとれ
めしてむらさきの上乃御りとへなりひかう
ぬゆめをこそみく侍るつきとしあさ
ハこれをとりたりとしひゆるしまへと此さ
まひて此年なり

しかくしまつそなりしかりそめれ
みなめはあさのさしさひなれとも
とまこそとうりまひしなりこれをとれ
もしかなりしとのふるりむらさきのうへ
うらなりしもなりひかるかなりしを
まつまりなくはあしし 抱そし
此年なしとあれをてつをさせるや
十一 漂澪 みを浮り
此事をアルを浮りしとうふすれ
かしとなりてなれハのことをかひまさに
なにみを浮りしなりひそめそん





それよりまゐりまゐらせ給ふしいの事をも
ひきのけとうろくつくろりをなとして
二三年あるまて二条のゐんひしのさい
まうろしてゆちしまてさうりあひ
なるまとくらくゆんりくるにうちいさ
いくきこかくりしいてきまゐりうち
人なりそ時のゆ弁そりしかんし
さうひてもまゐこそとりめみちあなく
ゆきさりきのりしのうろを
よもきゆよい
ひ歯
ひち

かさ
ゆくろふ
きつひのまとうら
あまくる屋と
なとのゆのもあつも浴くへしとたまもとき
あれしなとくいふすもありみときふ
まゐつむなとくらつるとのふすへいひ
としこうへんふれし此まゐつむの女房の
めれとるるもしか侍従とてまゐつむよい
歯さるまてそんしなとの女のなとすとも
中まゐへ侍しくあるもしをまゐつむのれ
とあるへしかりしへ浴くし大戯よ

なるまでおもしれつもこひ爲てさつるまで
志も侍従もたとへなきにありき御なれハ
さそふあらはとおもひし程に姫君を
うちまでくゐてさらりてそなりに出て
のかちゆてかつらをして持のへなりとう
つくしくて九尺ばかりなるへをくるを出
りこゝこまして侍従にこひしなりしよす
んえハし

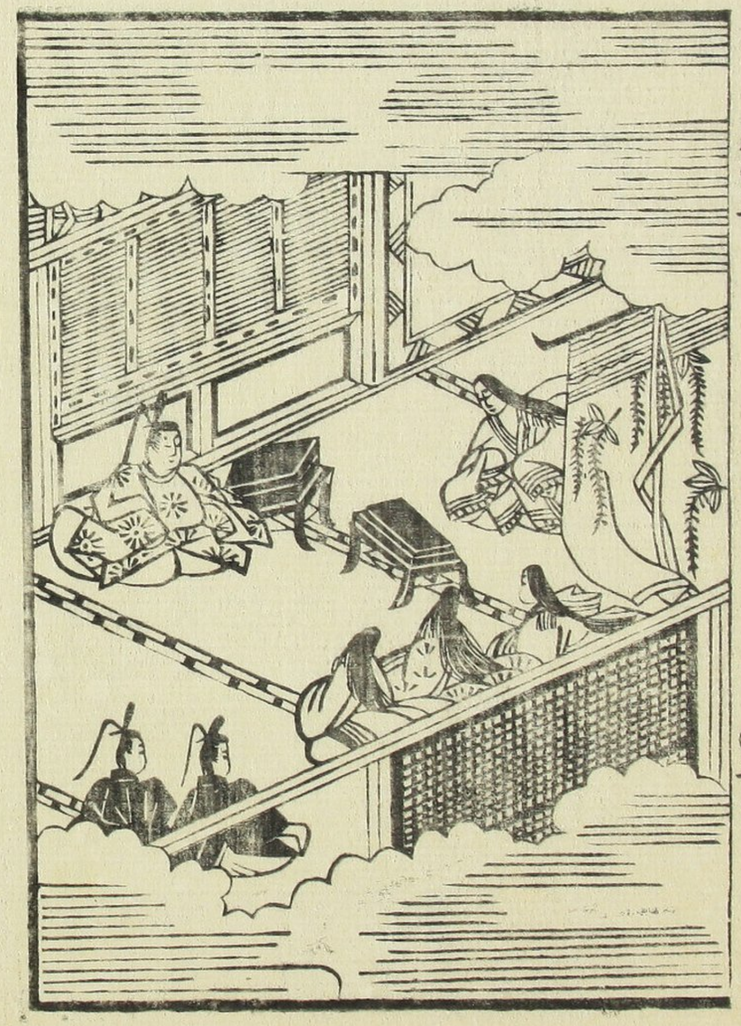
十二 綺合

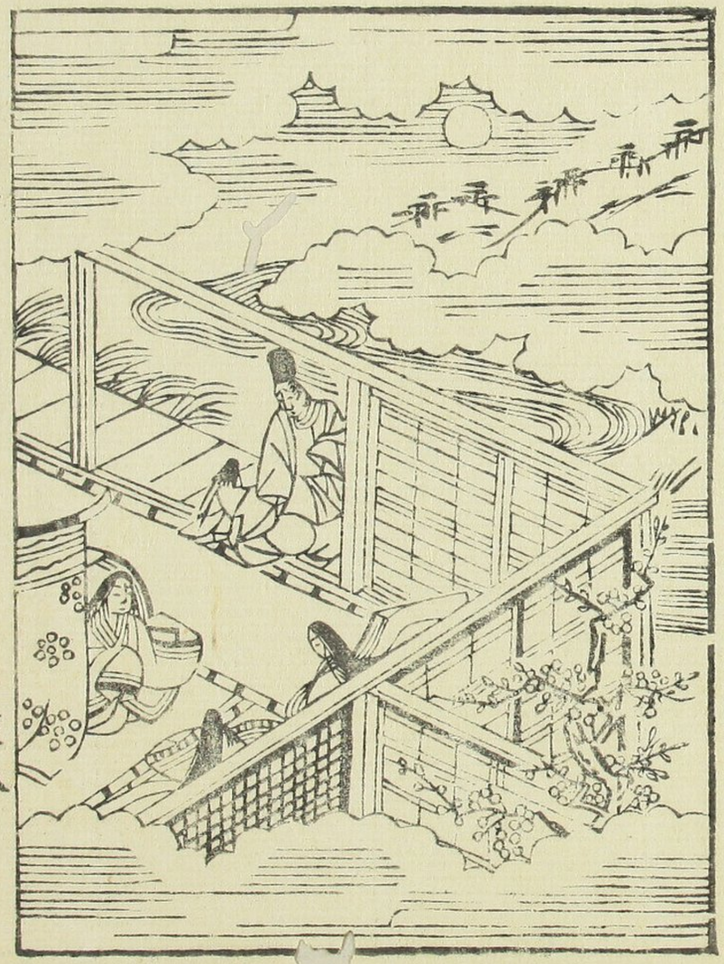
此書ゑありせしいふすそのはれ尺ハせ
ハうんし有つかの文れ出たるに志のひて

いてくさのひし文ゆくれりしまれ程にハ
冷泉の院とかは文人あるにハ相つかのみと
のすまあらりまふ文まてこゝのわかれ出と
としまてれりしまりしまうハゆつゝあれ
法ゑ世のふかれ来蘆院にハ御とましき文
れりし後さ法みを法つしの二月にとうう
まさちのふとうくうたりそいとれさ
たくれりしまりしかゆ門のみよにハ
陳氏にまろ法をたりしひなるまのふむし
のあふひのこれ出ちゝ左右に成やつしやう
をもとせのふるまるまるまるまいのまゝにて

めてこし此孫の姫君あらきてんにきふ
らひすゝ宮左衛門の所まことなるもちしの
れとゝのむすめなりみを清らしの八月
よおなしく忍あつせの君へみ今ゝしの
かゝひすひしいせのゝ君をとゝろの所ちゝ
のさいくゝに立すひしし知りさせあひて
ゝんし此さいくゝを所子にしてまゐりて
貞人第ゝせすへハとりくの所あはしまて
梅つかとゝ後にハきさ所に立すふ見
うしまゝろ所の所ことゝもゝ忍にこのま
せすへハたゝうくうちあつめ来しせあふ

そろハ三月十日ころなれハたゝこのそらも
ゆりしろき比うきてんとゝ梅つかとさう
とまゝうち所忍あらせあつまてみしゆらん
ありせいるやうてんのひろひさしに所君
よそひて内の所うしまゝしせあふ此所
こちの所こいくりんに八世房を三人所
出されたりんとにさうそきてさふし
りるゝ三ゝ人のゝ君のゝ所ことなし此
ちんしあふ





十五 槿

此書あさがほといふすがたしの所ニ
あさがほのさいのあんとして或ものの姫
君がものいつきまてれりしくらゆりぬさせ
あひてでんさいのあんとやかの所をこへの
所ニ

みぬりの霧ますまぬあさがほの
そのさうりはすきやしぬらん

とよみてしそまつりしかへにあさがほの
書といふなるものいつきま
てれりしかのいつきのうちまて

もの所ニよりけてかうせあるとも行ふ所ニ さけ
しきの所ニすのあるともおくらうすけのしさせ あへ
ともつのれ所ニつくてやまのかれ あれなりて
ハ所おそのあくそれ あるよ一ところますさ
まふなりそのことは

あさがほ

あくいふすまろけ所ニ所ニつきゆへに
やあやかしまやかれしるのれかに行り
こちのひしかくもの所ニつくてのちに所ニ
に所ニしれろしまふ所ニかきすやさし
さきあしとは所ニへし